名古屋大学東洋史研究報告　二七号　二〇〇三年三月発行

批評と紹介

Beverly J.Bossler, *Powerful Relations: Kinship, Status, & the State in Sung China (960-1279)*

小林義廣

一九八〇年代に入って、米国の宋代史研究は以前にも増して活況を呈してきた。その契機は、いうまでもなく八二年に公表されたロバート・ハートウェル（Robert Hartwell）氏の論文と、その論文の提言を敷衍した教え子のロバート・ハイムズ（Robert Hymes）氏の八六年の著書であった。[1]

ハートウェル氏は、唐と宋の間の歴史的変化の問題（いわゆる唐宋変革論）を、もう少し時間軸を延ばして、八世紀中頃から一六世紀半ばまでの間に設定して、長期的展望に立って見ようとした。しかも、スキナー（William Skinner）の大地域（macro region）の概念を取り入れて、大地域内と大地域相互間におけるそれぞれの変化を、人口・政治組織・政治の担い手などの側面から分析して、この長期間にわたる変化の実相を明示しようとした。とりわけ、その後の宋代史研究に多大な影響を与えたのは、北宋と南宋との境目に士人の官界・政界に対する態度の断絶を見出した点であった。つまり、中央政界に人材を送り込み姻戚関係を通じて互いの結束を維持してきた専門職エリート（professional elite）は、一二世紀を境として歴史の舞台を降り、それに代わって中央での出世には関心をもたず、地域社会の中での威信の確立と継承や、地域社会での利害に関心を寄せる地方縉紳（local elite）が台頭し、時代の主役を担っていったというのである。こうした指摘を継承したロバート・ハイムズ氏は、考察の場を江西撫州に限定して、主に地方の縉紳が地域防衛・賑恤・寺院建設・婚姻などを通じて地域社会の中に威信を確立していった様子を具体的に立証しようとした。

両氏の言説は刺激的で示唆に富んでいただけに大きな反響

をもたらした。とくにハイムズ氏の事例研究に対して、ヒュー・クラーク（Hugh Clark）氏は、宋代においても特定の地域を対象とする地域史が可能なことを示したと高く評価し、氏自身は宋代の泉州の盛衰の要因を南海貿易や当地を取り囲む後背地、市場ネットワークとの関連から解明しようとした。[2] しかし、ハートウェル氏とハイムズ氏に対しては、厳しい批判も寄せられた。たとえば、リチャード・デイヴィス（Richard Davis）氏の論著は、篤実な実証に裏付けられた本格的なものであり、そのためかボズラー氏も本書の序章（Introduction）において、デイヴィス氏の批判点を簡潔に紹介している。デイヴィス氏は、南宋時期に三人の宰相を輩出した明州（浙江省寧波市）の史氏一族を取り上げ、南宋になっても史氏のような微賤から身を起こして出世し、子孫も中央の政治に関心を抱き、政府の高級官僚を輩出しつづける一族の存在を呈示したのである。[3]

小論が取り上げる本書も、「謝辞（acknowledgment）」や序章に直接の言及があるように、ハートウェルとハイムズという二人の師弟、とりわけハイムズ氏の所説を強く意識している。ただ、ボズラー氏の場合、拙評の後節の内容紹介から自然と判明してゆくように、両氏の所説を敷衍したというのではなく、むしろ批判的な立場から検証し、独自の見解を披瀝しようとしている。そして、注目すべきは、両氏への批判を通して中国の家族や宗族の政治的・社会的役割に対する従来の見方と異なるボズラー氏独自の考えが示されており、そうした点に本書の貴重な価値があると思われる。加えて、本書は九八年に刊行されて以来、欧米・日本の宋代史研究者にかなり知られ、欧米では現在に至るまで少なくとも数点の書評が公表されているにもかかわらず、日本では本格的な紹介や書評は管見の限りみられない。これらの点から、宋代の宗族に関心を寄せる私が刊行から少し時間が経っている本書を紹介することもあながち無駄とはいえないであろう。

一

本書は、九一年、カリフォルニア大学バークレー校に提出した学位論文（dissertation）を基として刊行された。序章と終章（「結論」）の部分を除いて、本文は全部で九章から構成されているが、内容からすると、中央の高官を中心とした前半と、婺州（浙江省金華市）という一地域の士人に限定した後半との前後二つの部分に分けられる。前半は一章から五

章までで、五章は本書の前半と後半を繋ぐ過渡的な役割を担っており、本章の最後には他章にはない「結論（Conclusions）」の節があって、本章の「まとめ」がなされている。後半が六章から九章までで、九章には五章のような独立した節としての「結論」はない。本書は、また、序章、一章と終章を別にすると、各章の初めには当該章の「ねらい」や目的といったものが簡潔に記されていて、各章を読み進むときの指針となる。次に序章以下、結論に至るまでの内容を簡単に紹介していこう。

序章（Introduction）は、いきなり北宋と南宋時期の二つの婚姻をめぐるエピソードの紹介から始まる。一つは、一〇〇二年、参知政事の王旦が長女の婿に、親族の反対を押し切って科挙に及第したばかりの韓億を選んだことであり、二つ目は、それから一世紀半後、婺州義烏県（浙江省義烏県）の地主の何恢が弟の何恪の熱心な説得によって娘婿として陳亮をしぶしぶ認めたという話である。この二つのエピソードは、本書の中で何度か繰り返し持ち出されるように、本書が探求する主題と密接に関わっている。本書の主題とは、著者によると、宋代における中央・地方のエリートたちの婚姻環境であり、それと関連して彼らの家族・親族を取り上げ、さらには科挙や官職がエリートの親族関係や社会的地位にどのような影響を与えたかも考察することだという。このため、本書の前半部分では『宋史』宰輔表（巻二一〇～巻二一四）に載る両宋一三三人の宰相を取り上げて、彼らとその家族の社会的行動がいかに宋代を通じて変化していったかを観察し、後半では婺州を故郷とする人びとに焦点をあて、前半では見ることができなかった地域社会の、富と地位において様ざまなレベルの人びとの交流を婚姻関係を中心にその様子を観察しようというのである。

第一章「歴史と歴史叙述の変化（Historical Change and Historiographical Shifts）」は、全体として主に本書で使用される神道碑銘・墓誌銘などの碑銘の記述内容の歴史的特質を提示し、それらが家族（宗族）構成と姻戚関係を復元する好適な資料群であることを主張する。銘文は、九世紀半ば頃から内容上に変化をみせるが、唐代までは銘文で語られる人物は、直接的であからさまな言い方を避けて隠喩に満ちた記述がなされるのに対して、宋代になると隠喩的記述は陰を潜め、日常の細々したことまでも記載されるようになる。また、宋代の銘文は唐代までと異なって、銘文作者自身や作者と銘文に書かれた人物との関係の情報を多く提供してくれる。ま

た、宋代になると、郡望は単なる装飾にすぎなくなり、祖先のことよりも子孫の功業に多く関心が寄せられるが、何といっても未亡人に対する評価が、唐代までのように出身家族に従って下されるのではなく、彼女自身の行為それ自体に基づく点が特筆されるという。両宋の、政治的に落ち着いたそれぞれの時期を比較すると、南宋の場合、北宋と異なって政治的地位が高いからといって碑文が残されるとは限らなかった。なぜなら、北宋の安定期の宰相の六七％に碑銘があるのに対して、南宋の同じ状況の場合、四六％にすぎなかったからである。南宋時期はまた、道学関係者を対象とする碑文が多い。婺州に関していうと、当地出身の北宋の碑文資料は少なく、南宋時期は一一六〇年から一二〇〇年までの間に集中しているが、それらは大部分、鄭剛中・陳亮・呂祖謙という当地出身の三人によって書かれている。地理的には婺州の治所のある金華県出身者に多くの碑銘が存在する。

第二章「権力者の祖先――宰相たちの素性（Precursors of Power: The Origins of Grand Councilors）」は題名から分かるように、次の第三章と一対の構成内容となっている。本章は、最初に、前掲の『宋史』宰輔表に載る宰相の祖先を、父・祖父・曾祖父の直系三代まで遡ってその官職状況を調べ、こう結論づける。すなわち、高級官僚の家の出身者が祖先と同じく高級官僚となっていた事例に事欠かないと同じく、新興の家からも多くの高級官僚を生みだしていた、と。次に、宰相たちが最終的にどこに居住し埋葬されたかを検討し、北宋では開封かその近辺に居住し埋葬されているのに対して、南宋では大半の宰相が父祖の土地に住居を残し、そこに埋葬されたと述べる。両宋における、そうした相違の原因について、著者は、北宋の場合、開封が他の地域では得られないレベルの社会生活や、科挙や昇任に必要な様ざまな便宜を入手できたが、南宋の場合、そうした便益は臨安やその近郊に居住していなくても獲得できたと述べ、決して中央政治と高級官職に興味を失っていなかったと主張する。この南宋に関する主張は、いうまでもなくハートウェル、ハイムズ両氏の所説を念頭に置いている。次に科挙を取り上げ、宋代の科挙はかつていわれていたほどには社会的移動のエンジンとはなっておらず、ことに南宋においては宰相を初めとするエスタブリッシュメントの家族にとって、むしろ、その地位を維持するメカニズムとして機能していた。ただ、科挙に参加することは、たとえ及第に失敗しても勉学の過程などを通じて官界や国家とのつながりを形成し、ひいては中国の国家と社会と

の統合を促進する働きをもっていたと、科挙のそれなりの効用を説いている。本章の最後は、高級官僚になるために必要な要素は何かを考察し、それは科挙の成績よりも既成の高級官僚との人的繋がりやその後援であり、当然、高級官僚の子弟が、こうした非公式の後援を得やすかったと述べる。ここでの主張は、次第に明らかになってゆく本書全体の主張の伏線となっている。

第三章「権力の保持――宰相たちの子孫（Preservation of Power:The Descendants of Grand Councilors）」は、どのようにして宰相の権力と地位が子孫たちに継承されていったかをみている。まず、党争や北宋政権瓦解による宰相たちの子孫に対する影響を考察して、短期は別にして長期にわたる子孫への影響はほとんど無いと述べ、しかも平穏時期の宰相たちの子孫と比較しても政治的地位の保持に関しては良くも悪くもなっていないと結論づける。この主張も、それとは明示しないが、ハートウェル、ハイムズ両氏の所説を念頭に置いている。両氏の、党争こそが北宋の専門職エリートを没落させ、エリートたちを中央よりも地域社会における威信確立に向かわせると考えたことを批判したといえよう。次に、本章の主題の、宰相の政治的地位が子孫たちの地位にどう影響したかを考察して、その直系の子孫のみが恩恵を蒙り、傍系に及ぶことはあまりないと述べ、続いて唐突に、特定の個人の政治的将来は男系親族よりも母方の祖父、あるいは妻の父との関係がとても重要であったと主張し、次章以後の姻戚関係の探求に繋げている。

第四章「権力者のパートナー――宰相の家の婚姻（Partners in Power:Grand-Councilor Marriage）」は、まず、豊富な事例を挙げて、宋代の宰相の家が婚姻相手を同じ宰相の家や、王朝の極初期には帝室にも求めていた一方で、科挙に高位で及第した若者を婿にすることもあったことを示す。これらの現象は、著者によると、政治的高位にある人たちは似たような地位の人と婚姻を結ぶ傾向があることを表すとともに、政治的地位の流動性に鑑み、将来性ある人材に賭けてみるということをも意味するという。次いで、著者は、政治的・社会的地位を維持してゆくためには、宗族との結びつきよりも姻戚関係が重要であったという本書で繰り返される主張をここでも重要な論点として指摘している。また、両宋の宰相の家を比較すると、南宋の宰相の家も北宋の場合と同じく、政治的地位が似たもの同士で婚姻が結ばれたが、北宋の場合、首都圏に高級官僚が居住していて近辺に婚姻相手を見つけてい

たのに対して、南宋では宰相さえも郷里に住居を残してきているので、婚姻が遠距離にわたり散在する傾向があったと述べる。

第五章「権力者たち――二つの事例研究（Powerful People: Two Case Studies）」は、胡則（九六三～一〇三九）と王淮（一一二六～一一八九）という、いずれも婺州出身で、北宋と南宋のそれぞれにおいて高官となった二人を取り上げ、彼らや彼らに近い親族の姻戚関係を中心に叙述が展開されている。そして、上述のように本章には結論の節があり、そこでは、最初に、王淮を生みだした王氏一族の特徴をまとめている。著者によると、王氏一族に関して重要なポイントは三点だという。①王氏の権力への階梯は、何世代もかかって次第に上昇していった。②しかも、権力獲得への道のりは、全族ではなく特定の房支に成功をもたらした。③特定の房支の成功は、当該の房支の、社会や婚姻のネットワークに影響を与えたが、他の房支に対する影響はほとんどなかった。「結論」は、このような王氏一族のポイントを押さえた上で、更に本章全体にわたる「まとめ」の考察に叙述を進めている。すなわち、胡氏と王氏の事例にみられるように、身近な親族であるからといって、密接な結びつきを意味しないことは、北宋も南宋の場合も同じであった。姻戚関係は、こうした親族内の不均等を作り出し、それを維持する役割を果たした、と。最後に、こうした両宋の高官一族をめぐる同一の傾向は、あまり地位の高くない婺州出身の人たちにもみられるのかどうかを検討しなければならないとして、次章以下の婺州という地域に限定した論述の橋渡しをしている。事例研究に婺州を選んだ理由は序章に記されているが、六章以下の後半部に関わるので、ここで著者の述べる理由を簡単に紹介しておこう。第一に、婺州は他の江南地域と同じく、唐末五代に人口が流入し北宋時期に急速に発展を経験したが、南宋時期に都が近くの臨安に置かれるという特異な場所であったこと、第二に、当地は南宋において四人の宰相を輩出するとともに、北宋の政治に重要な役割を担った人物の数家族の子孫が南宋時期に移住したことによって、宰相に関する各章において考察した人たちとの比較や、土着の人たちと移住者との比較が可能であること、第三に、婺州とくに州治のある金華県は道学の重要な中心地であって、記録が多く残されたこと、が挙げられるという。

第六章「地位を求めて――婺州におけるローカル・エリートの出現（Seeking Status: The Emergence of the Local Elite

in Wu-chou)」は、最初に婺州の自然地理や産業などが紹介され、次に北宋初め、当地の地域社会における地位や威信は、土地所有と密接に関わる家柄に依拠していたが、一一世紀半ばから科挙やそれを主な契機とする官職が次第に地域社会における地位に重要な意味をもってくると述べる。最後に当地出身の官僚は北宋時期の一部の高級官僚を除けば、当地に留まる傾向が強く、また婺州内においては家の繁栄に伴って郷村から都市へと移動する事例が稀でなかったと指摘している。

第七章「地位の維持――婺州居住の宗族の子孫（Sustaining Status:Wu-chou Descendants）」は、とくに婺州の男系親族グループである宗族の特色を取り上げている。宗族を問題にするのは、エリートとしての地位を維持しつづけることに宗族がどのように関連しているかを探ろうとするためだという。著者によると、婺州に関する史料は、確かに有名な金華の義門鄭氏一族のように相当程度の規模の宗族の存在を繰り返し報じているが、遠い血縁関係の族人が一緒に暮らす現象はそれほど一般的ではなかったし、制度化された族人救済もそれほど盛んだったとはいえないという。要するにエリートの社会的地位の維持にとって、宗族は婚姻ネットワークほどは重要な役割を果たせなかったというのである。

第八章「地位の共有――婺州における結婚と姻戚関係（Sharing Status:Marriage and Affinal Relations in Wu-chou）」は、婺州の人びとが姻戚に何を求め、婚姻が何に基づいてなされたのかをみようとしている。まず、婺州の人びとは宰相を輩出した家と同じく、同一世代内においては様ざまな一族と婚姻関係を作り、一度結んだ姻戚関係は何代も継続する傾向があったという。そして地域エリートが危機的状況に陥ったとき、姻戚こそが男系親族よりもしばしば有効な救済の手を差し伸べたし、女性を介した親族的結合が男性の社会的活動の手助けとなったと主張している。また、婚姻に付きまとう選択ミスというリスクを軽減するため、婺州では甥や姪を義理の息子や娘とする実例が少なからずあった。婚姻締結の距離についていうと、婺州の地域内外ともに婚姻相手をみつけることがあったが、両宋を通じて官職に深い興味をもつ人びとは州を越えて遠距離の婚姻ネットワーク作りに強い関心を示したという。ここにも、それと明示されていないけれども、ハイムズ氏の、南宋になると同一州内に婚姻が限定されてゆくという見解に対する批判意識が見出される。

第九章「婺州の地域型縉紳――二つの事例研究（Local Gentlemen in Wu-chou:Two Cases Stadies）」は、鄭剛中

（一〇八八～一一五四）を中心に金華県の鄭氏一族と、陳亮（一一四三～一一九四）を中心に永康の陳氏一族のそれぞれの姻戚関係を取り上げているが、五章で胡氏と王氏を扱ったときには、どのように家を起こしていったのかを問題にしたのに対し、ここではすでに確立された家がどう維持されていったのかに焦点をあてると著者は述べる。鄭剛中にしても陳亮にしても晩年になって科挙に及第する（陳亮は死去の前年）という苦労を重ねる点で共通するが、鄭氏の姻戚関係は鄭剛中の属する西房が大した家柄との関係を結んでいないのに対して、東房に属する鄭汝嘉をめぐる人びとは官僚の子孫と多く姻戚関係にあった。つまり、鄭氏は同じ一族でも房支によって、姻戚関係に大きな差違が認められたのである。他方、陳亮の一族は全体として官職との関係は薄く、姻戚関係をみても陳亮を別にすると永康県を越えて名望ある家と結び付くことはなかった。

「結論（Conclusion）」は、本書の主張するいくつかの論点を纏めている。その主要な論点は、これまでも繰り返し紹介してきたように、ハートウェル氏とハイムズ氏、ことにハイムズ氏の所説に深く関わっている。第一は両宋のエリート層の、主に婚姻関係の地理的範囲をめぐる問題である。ハイムズ氏の所説は、拙評の最初に紹介したように、北宋時期、中央の官僚は家門の維持のために出身地に関わりなく姻戚関係を結んだが、南宋になると地域社会の範囲（具体的には同一州内）で婚姻を締結するようになると論じた。それに対して、ボズラー氏は中央政界で活躍し中央政治に関心をもつ国家的エリートは北宋と同じく南宋にも存在し、そうした南宋の国家的エリートたちは地理的距離にこだわらず、相変わらず政治的地位の高い人たちと婚姻を結び、子孫に高い地位を保持させようとしつづけたと主張している。他方、地域社会の利害に主に関心を寄せる地方縉紳（local elite）も南宋時期だけでなく北宋時期にも存在していた。ただ、南宋時期になると、学問人口の増大が、官職をもたない士人層の増加を生みだし、道学は彼ら官職に望みのない士人に対して学問が官職ではなく自己修養のためになされるという生き方を提示し受け入れられた。道学は中央よりも地域に関心を向けたが、そのため道学の体制化・正統学問化によって地域社会に関心をよせる作品が多く生み出され後世に残された。こうした理由に基づく史料の残存状況が両宋間の（ハイムズ氏が示すような）社会的変化を実態以上に際立たせたのである。この第一の問題と関わってボズラー氏は次のような指摘もしている。

すなわち、社会的地位は政治的地位と密接に関連するが、エリート層と非エリート層は隔絶した社会階層ではなく、その境界は相互浸透性をもち、個人単位でも家単位でもエリートの最上層から非エリート層までの各階層はなだらかに連続している、と。第二の重要な論点は、ハイムズ氏が個人の社会的地位に男系親族という要素が大きな役割を果たし、宋代には宗族化傾向とでも称すべき状況があったと主張するのに対して、ボズラー氏は宋代では宗族はまだ未発達で、個人の社会的地位は男系親族の影響よりも母方や妻方の親族の影響が重要であった、つまり姻戚関係が大きな意味をもったというものである。ボズラー氏は、この「結論」部分で、主にこうした二つの論点を主張しながら、最後に、宋代に確立され後世に深刻な影響を与えた社会的実践パターンは、学問をして官職に就く可能性を秘めていることこそが、男性にとって本当の価値なのだという点であり、古典教育と国家的仕事への就任が後期中華帝国を通して人の社会的地位を示す注目すべき目印であったと締めくくる。

二

以上の拙い紹介からも本書の豊かな内容と創意にみちた見解を窺い知れよう。とりわけ、繰り返しになるが、北宋と南宋のエリート層の志向に断絶よりも継続性を見出そうとすること、個人の社会的地位に宗族よりも姻戚関係を重視することなど、本書の主張の中軸となる点は、かなりの迫力と感動をもって読む者に迫ってくる。これらを勘案すれば、本書が近年の宋代史研究における優れた著作の一つであることに異論を差し挟むものはそれほどいないであろう。

ところで、どれほど優れた論著にも史料誤読や勘違いなどの瑕疵は付き物であり、むしろ瑣細な誤りは論旨全体に関わらないかぎり、大目に見てしかるべきものであろう。だが、瑣細なミスも度重なり頻出すると看過できなくなるし、ましてそれらが全体の論旨と関わる場合は尚更である。本書を読み終えて、宗族の役割を過小評価する著者の見解に対する違和感を別にしても、その論理的説得性に一抹の不安を覚えたのも、こうした問題が心に引っかかっていたからである。気づいた点を挙げてゆこう。

本書の第一章が行状、神道碑銘、墓誌銘など碑文の性格を論じた章であることは前述した。一一頁にはこうした碑文の多くが作者の身近な友人や親族のために書かれたと論じ、ただ例外の一つとして欧陽脩を挙げて、彼は文章家としての名声の故に碑文に書かれた人物の大多数は彼と直接に関係せず、中には皇帝の命令で書かれたと記す。しかし、欧陽脩の文集を紐解いたものならば誰でも知ってのとおり、叔父や姻戚、友人など身近な人物を対象とする碑銘もかなりあるし、名声や皇帝の命による碑銘作成ということならば、蘇軾や司馬光ら北宋の著名な士大夫にかなり普通の（usual）現象であって、欧陽脩だけが異例（unusual）とはいえないのである。欧陽脩が出たのでついでに彼に関する他の誤りも指摘しておこう。五七頁に『宋史』巻三二七「王安石」伝に依拠して、曾布が王安石を欧陽脩に引き合わせ、それを契機に王安石の文名が広まったと記すが、欧陽脩に引き合わせたのは曾布ではなく、兄の曾鞏である。むろん、『宋史』の当該箇所もそう記述している。次に二七六頁の、第四章の註六七は、王安石・欧陽脩ら北宋の高官の子弟の婚姻相手がやはり高官の子弟であること、高官の子孫の居住地が首都圏でなければ大運河沿いであることを注記する。ただ、欧陽脩の子孫が首都に移転したという記述は誤りで、欧陽脩が晩年に隠居地と決めた潁州（安徽省阜陽市）に少なくとも北宋末までその子孫の一部が居住していた。[4]

更に瑣細な記述の誤りを指摘しよう。三八頁、徽宗の即位を一一〇一年のこととするが、これは一一〇〇年が正しい。五八頁（及び二六五頁の註一三二）、范仲淹の紹介によって、宰相の晏殊が将来性のある富弼を娘婿にしたと記すが、このエピソードは富弼の伝記史料によると、富弼が制科を受験する天聖八年（一〇三〇）以前のことであり（『蘇東坡全集』前集巻三七所収の富弼の神道碑銘）、この時点では晏殊は宰相となっていない。晏殊は、天聖八年以後になって参知政事（副宰相）から同中書門下平章事（宰相）へと出世の階段を登り詰めていった（『欧陽文忠公集』居士集巻二二の晏殊の神道碑銘）。ついでにいうと、このエピソードを初めとして、ボズラー氏は史料として丁伝靖の『宋人軼事彙編』を多用しているが、この書物は近代になって、宋代の筆記小説などから人物ごとに関連する逸話を抜き出した、いわば二次史料ともいうべきもので、特定の人物の逸話を読むには便利だが、いうまでもなく引用には該書に注記してある原本を使用するのが望ましい。七二頁、司馬光が一〇七一年に実職を離れて

から死去する一〇八六年まで洛陽を離れなかったと記すが、周知のように、元豊八年（一〇八五）三月に神宗が死去し哲宗が即位すると、司馬光は同年五月から翌年九月に死去するまでの一年余りは都の開封に留まり、その間、門下侍郎（次相）や尚書左僕射兼門下侍郎（首相）として政治の中枢にあって、王安石の新法を次々に廃止していった。こうした経緯は、ボズラー氏も依拠する校点本の『司馬光年譜』（中華書局、一九九〇年）にも丁寧に記されている。

細々としたことをあげつらってばかりいても仕方ないので、多少とも論旨と関わる問題に移ろう。本書は、上述のように個人の社会的・政治的地位にとって男系親族（宗族）よりも姻戚が大きな役割を演じていたと繰り返し述べている。その理由の一つとして宋代では宗族がそれほど発達していなかったことを挙げているが、それでも婺州は明代に義門鄭氏が有名になるほどの土地柄で史料も宗族組織に言及しているということもあって、第七章は当地の宗族にかなりの紙幅を割いている。とくに著者は宗族の規模に関心があるようで、しばしば宗族の族員数を取り上げている。問題と思われるのはその族員を数える単位としての「指」である。著者は「口」と「指」を全く同じ単位として扱っている。つまり、百口も百指も百人を示すというのである。「口」は「くち」であって一人を示すことに異論はないけれども、「指」は「ゆび」であって、十本の指すなわち「十指」で一人と解釈するのが普通であると考えられることからすると著者の解釈は奇異な感じがする。そこで、「一指」を一人と数える論拠を著者が展開する三〇一・三〇二頁に載る第七章の註五〇の記述の紹介から始めよう。著者によると、婺州に関する史料において「指」が人間を数える方法となっていて、「指」は「食指」(index finger) に由来する語句で、したがって千指といえば、食物を与え養わねばならない人間が千人ということを意味する。このことは、『中文大辞典』の「指」の項に載っている。また、韓元吉『南澗甲乙稿』巻二二「栄国太夫人上官氏墓誌銘」には、当該の夫人が「十指」と世帯を共にして暮らしていた記され、この「十指」は明らかに十人を示していると考えられる、と。「指」を「口」と同じと捉える著者の論拠は以上のとおりであるが、この註は、また、「指」＝「口」とすると、婺州の宗族が場合によって千人を超える大人数になってしまうという点を流石に心配しているとみえて、これら宗族員の数字の中には、同族の他にも奴僕や召使いといった人間を含んでおり、それらの人間が政府の帳簿上にお

いて主家と同一の世帯として把握されていたために起こった現象だと著者は推測を交えて論定している。

結論からいうと、以上の論拠は乏しく、「指」を全て「口」と等値する説得性に欠けると思われる。少しずつ検討していこう。まず、『中文大辞典』であるが、当該箇所には「計人口曰指、如云食指浩繁」とある。これは人間を数えるときに「指」という言葉が使用される場合があって、その一例として「食指浩繁」という成語があると述べている。「食指浩繁」の意味は「養わねばならない人がとても多い」であって、「食指」は「ひとさしゆび」ではなく、「養わねばならない人」なのである。つまり、『中文大辞典』は、ボズラー氏の指摘するように、「指」が「食指」を意味するといっているわけではなく、ここからは「指」＝「食指」＝「口」という図式は導き出せない。

次に『南澗甲乙稿』の記事である。ボズラー氏は叢書集成本の『南澗甲乙稿』を使用しているが、確かに私の見た限りでも、四庫全書本や百部叢書本も当該箇所は、「聚居十指」となっていて、これは文脈から考えて十人の家族と一緒に生活していたと解さねばならないだろう。だが、一般的には後世の史料に至るまでも「十指」＝「一口」＝「一人」として解釈されているようである。たとえば、人間を「指」で数える明清時期の事例が小山正明氏によって数多く紹介されているが、氏も「指」という単位は「十指」＝「一人」という一般的な計算方式に従っている。[5] 要するに、「指」＝「口」という用例が皆無とはいえないにしても、やはり普通には「十指」＝「一人」と見なすべきなのである。加えて、義荘の嚆矢で、しかも創始後ほどなく王朝の後ろ盾もあって組織化が進み、九〇〇年近く存続した范氏義荘に集う蘇州の范氏一族も、義荘の開始時には九〇口ほどで、南宋になっても数百人程度の規模であったといわれる。[6] 宋代の他の宗族に関する史料をみても、煩瑣だからいちいち史料は挙げないが、組織化された宗族でも数十人規模、多くて百人単位と考えられ、千人を越えるのは明代もかなり後になってからである。また、本書にも触れられ、元代に累世同居として急速に組織化を遂げる婺州の著名な鄭氏一族も、檀上寛氏の研究によると、元末の段階で二百人前後の規模であったという。[7] ボズラー氏が挙げる婺州の宗族が数百人、場合によって千人を越える規模のものが相当数もあると述べるのは、宋代の場合、にわかには信じられない数字なのである。

最後に、宗族の人数の多さの原因として、血縁関係者以外

に召使いや奴僕を含んでいたという著者の推測であるが、ボズラー氏が史料として挙げているのは、碑銘など私的な文章であって、丁籍や保甲簿といった行政に関わる公式の簿籍ではなく、そこにわざわざ主人（田主）の名の下に奴僕などを含めた人員数を記す必要はないのではなかろうか。また、奴僕などを含めた記述ならば、「童僕」「家僮」など、それと分かる語句が入っていることが多く、それらの語句が無いかぎり、やはり同族の人数だけだと捉えるべきであろう。

ところで、このようにボズラー氏が婺州の宗族を必要以上に大規模にみてしまうのは、意識的かどうかは別問題にして、当地において姻戚こそ個人の社会的地位の維持や助け合いに大きな役割を演じていたというイメージを、より際立たせるためであったように思われる。つまり、規模の大きさを強調することを通じて、それでも何ら役立たない宗族という構図である。私のこの推測はそれほど的を外れていないであろう。というのも、婺州の宗族の規模を論じている第七章で、氏は、後期中華帝国の研究において、エリートの地位の維持を宗族組織に求める意見を「陳腐（commonplace）」だとして切り捨てており（一四八頁）、また、既出の「結論」部分の紹介にも示されるように、明らかに、氏は、エリートの地位維持の理由を宗族以外の要素に求めようとしているからである。

しかし、当然ながら大規模な宗族が必ずしも組織化された宗族を意味するわけではない。これまで宋代以後の宗族が問題にされてきたとき、唐代以前の宗族と異なる特徴として組織化が取り上げられ、その徴表として近年の研究では一般的に族譜・祠堂・族産の三要素を挙げる傾向がある。[8] こうした組織化された宗族は、范氏義荘にみるように、一族の貧窮者を救済するだけでなく士人の再生産を、つまりエリート層の社会的地位の維持を目指していた。井上徹氏の近著は、更に論を進めて、宋代以後の組織化された宗族は何よりも士人の再生産を目的としていたと論じている。[9] それに対して、ボズラー氏は、第七章を典型として、婺州の宗族は祖先祭祀のような一族の活動はあっても、多数の族人が一緒に生活することは一般的ではなかったと述べて（一四八～一五五頁）、当地の宗族の組織化に否定的見解を示している。多数の族人を抱える宗族は存在していても、それは組織化の進んだ宗族ではなかったと表明しているのである。このようにみてくると、族人の多さをいくら問題にしても、一般的に宗族がエリートの政治的・社会的地位に役立たなかったという結論を直ちに導き出せないといえよう。氏の論証から言えることは、せい

ぜい、宋代の婺州の場合において、宗族は組織化されておらず、しかも姻戚関係に比較してエリート層の社会的・政治的地位の維持にそれほど役立たなかったという点であり、それ以上でも以下でもないのではなかろうか。

本書の主張とは直接には関わらないが、家族・親族を問題とするときに潜む文化的差違といったものを、読んでいて気になったので、余論として最後に記しておこう。私たち日本人を含めて東アジアに住む人たちは、ある個人を中心に近親者を呼んだり記したりするとき、兄とか弟、姉と妹、伯父と叔父、伯母と叔母など、ともかく年齢の上下を大体においていつも意識して区別している。brother,sister,uncle,auntだけでは何となく落ち着かないのである。本書でもelder (older)、youngerなどの形容詞を加えて年齢の上下を区別している場合もみられるが、(原史料に記載があっても) そうでない例も多く、少なくとも私は本書を読んでいて、いったい上下どちらなのか気になって仕方がなかった。たとえば、本書の序章から出てきて本書のテーマと深く関わる何恢の弟の何恪について、五八頁では何恢のbrotherと書いている。英語表記では、いちいちelderとかyounger とかをつけるのは煩わしく、また序章で何恢の弟の何恪と書いているからいいのかもしれないけれども、やはり私たち東アジア人には奇妙な違和感があるのである。家族・親族を追究するときも、使用する言語によって叙述内容が左右されるということは、自戒を含めて私たちの常に念頭に置いておかねばならぬことだろう。

註

(1) Robert M.Hartwell,"Demographic,Political,and Social Transformations of China,750-1550"*Harvard Journal of Asiatic Studies*,42-2,1982.Robert P.Hymes,*Statesmen and Gentlemen.The Elite of Fu-chou,Chiang-hsi,in Northern and Southern Sung*.Cambridge U.P.,1986.

(2) Hugh R.Clark,*Community,Trade,and Networks: Southern Fujian Province from the Third to the Thirteenth Century*.Cambridge U.P.,1991.pp.5-6.

(3) Richard L.Davis,*Court and Family in Sung China,960-1279:Bureaucratic Success and Kinship Fortunes for the Shih of Ming-chou*.Duke U.P.,1986.

(4) 拙著『欧陽脩　その生涯と宗族』(創文社、二〇〇〇年) 三〇八頁。

(5) 小山正明『明清社会経済史研究』(東京大学出版会、一九九二年)、とくに「明末清初の大土地所有——とくに江南デルタ地帯を中心として——」「明代の大土地所有と奴僕」。なお、小山氏の挙げるこうした用例については、森正夫先生の御教示に

よった。

(6) 范氏義荘の創設当初、族人が九〇口であったことは、銭公輔「義田記」(『范文正公集』所収)に記されている。また、北宋と南宋を含めた族人規模については近藤秀樹「范氏義荘の変遷」(『東洋史研究』二一―四、一九六三年)や遠藤隆俊「范氏義荘の諸位・掌管人・文正位について――宋代における宗族結合の特質――」(『集刊東洋学』六〇、一九八八年)が触れている。

(7) 檀上寛『明朝専制支配の史的構造』(汲古書院、一九九五年)一九九頁。もっとも、檀上氏の例も二千指を二百人と見なしているのであるが。

(8) 前掲拙著三二四・三二五頁。

(9) 井上徹『中国の宗族と国家の礼制――宗法主義の視点からの分析――』(研文出版、二〇〇〇年)。范氏義荘に関していえば、とくに第一章「宗族の歴史的特質に関する再考察」が、この問題を取り上げている。

Cambridge,Massachusetts:
Harvard University Press,1998. 212+162pp.

(こばやし　よしひろ　東海大学文学部教授)